

2026 年度 関ヶ原町不破関跡発掘調査現地説明会資料

2026.08.30 名古屋大学人文学研究科考古学研究室

教授 梶原 義実

1. 調査要項

所在地 岐阜県不破郡関ヶ原町松尾地内・柴井地内

調査原因 学術調査

文部科学省科学研究費基金（基盤研究（B）） 2022 年度～2026 年度

「三関周辺における古墳時代から古代の地域動態に関する総合的研究」（23K21984）

調査面積 41 m²

調査期間 2026 年 8 月 20 日～9 月 2 日（予定）

調査機関 名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室

調査協力 関ヶ原町（担当：地域振興課）

岐阜県（担当：観光文化スポーツ部文化伝承課）

株式会社イビソク

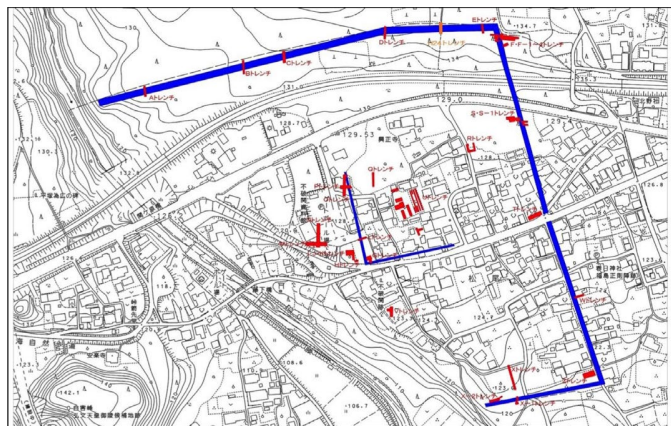
2. 遺跡の概要と調査の目的

不破関は 672 年の壬申の乱後に東山道に設置された関所であり、伊勢（三重県）の鈴鹿関、越前（福井県）の愛発関とともに、三関（さんげん）と称された。

岐阜県教育委員会・不破関跡調査委員会により、昭和 48 年（1973）から 5 年間にわたり発掘調査が実施され、西は藤古川の段丘面で画され、北（460.5m）、東（432.3m）、南（112.5m）の三方を外郭土塁に囲まれる範囲が不破関の範囲であると想定された。推定東山道に面して築地塀の内郭が設けられており、その中に掘立柱建物の政庁が存在する構造が復元された。また外郭の主要拠点には監視用の平面六角形の望楼が設けられたとされる（岐阜県教育委員会・不破関跡調査委員会 1978『美濃不破関』）。

本研究においては、その成果を踏まえつつ、不破関の全体構造を復元することで、関の機能や具体的な政務のあり方についてあきらかにすることを目的としている。

本年度は、外郭南西隅の状況および、関の構造物の小関地区方面への広がりを確認する目的で、発掘調査を実施した。



不破関トレンチ配置図（富田 2017「不破関の再検討」）

3. 2026 年度発掘調査の成果概要

2025 年度の調査において、不破関北西側の構造（望楼等の建造物を示す地盤工事の痕跡や関西側を石で覆った人工的構造）および、天満山南裾まで延びる土塁による防衛ラインを確認した。今年度はその成果を受け、不破関南西隅（9 トレンチ）および、小関地区の天満山北麓に残る土塁（10 トレンチ）の発掘調査を実施した。

1) 9 トレンチ

南限土塁が藤古川の段丘崖へと延びるとともに、途中で鈍角 T 字状に北側へとクランクして西限土塁へと続いていく状況が確認でき、西限土塁の外側には曲輪状の平坦地が巡っている。南西隅にどのような施設が存在したかを確認するために、長さ 12m の東西断割トレンチおよび、その南方に東西 8m、南北 4m の平面検出トレンチを設定した。

その結果、トレンチ中央付近で幅 4m 程度の南北溝（真北から西に 30 度前後振った方位）および、その溝がそこから鈍角（120 度程度）に南に屈曲していく状況が確認できた。溝の東側上部は貼石で平坦面を造成し、溝の東肩部にも貼石がみられる。平坦面には柱穴が 1 基確認できた。この溝は南限土塁が西へとクランクし屈曲していく角度と方位が一致しており、南西隅には土塁と溝で囲まれた、六角形の平坦地が形成された可能性がある。

また溝内からも約 80 cm × 70 cm の柱穴が確認できた。それと対応する柱穴はトレンチ西端および北側断面でも検出された。この 3 つの柱穴は溝埋土の褐色土に先行し、結ぶと約 120 度前後の鈍角となる。柱間は 3 ~ 3.3m。西側柱穴の抜取穴が南限土塁の西延長部の積み土を切っていることから、両者が同時期に並存していたこともわかった。

これらのことから、不破関南西隅の構造として、以下のことが想定された。

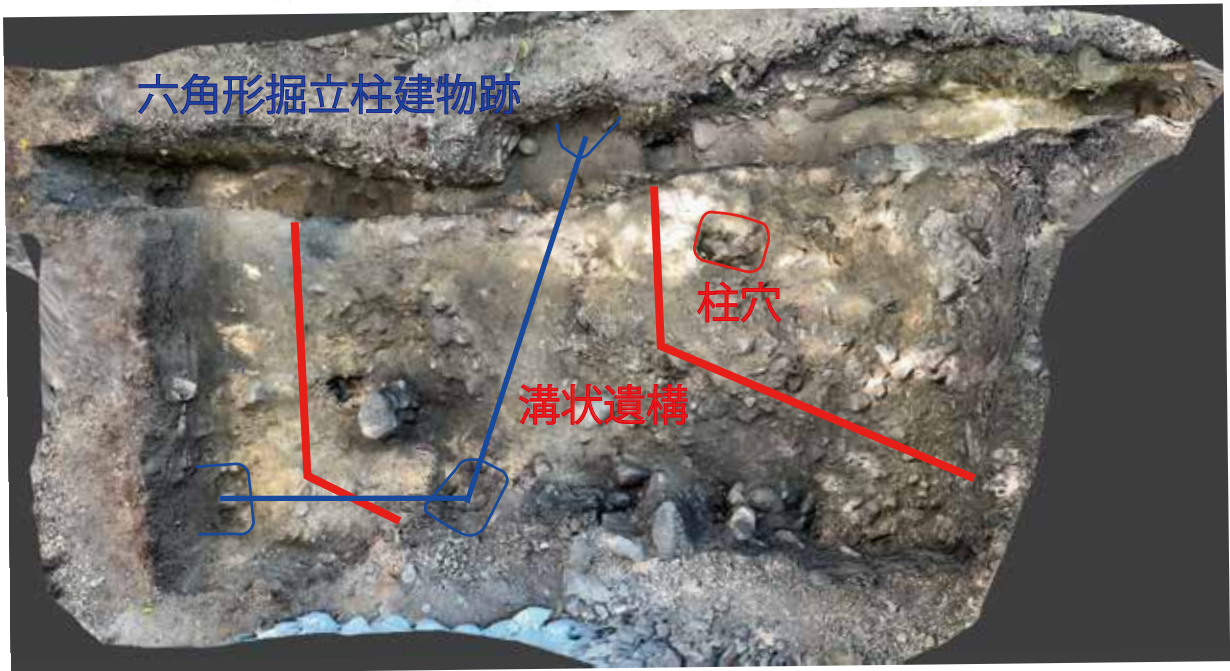
- ① 六角形の建物が南限土塁の北側西端に建造される。
- ② おそらく西端の段丘崖が崩落したため、より東側の安定した地盤上に六角形建物を建て直し、西側に溝を掘り、貼石をして囲んだ。

不破関では従来の調査で、土塁北東隅および、東山道沿いの西端（不破関資料館の南側）でも、六角形を呈する柱列が検出されており、望楼（見張台）であると想定されている。また 2025 年度調査においても、北西隅で建物の地業痕が検出されている。不破関では、要所に日本では珍しい六角形の望楼を築くことで、防御性を高め、また関の威容をあらわしていたものと思われる。なお、本調査では溝埋土から奈良時代中期の丸瓦・平瓦や須恵器が出土しており、建て替え後の建物の年代および、それが瓦葺であったことがわかる。

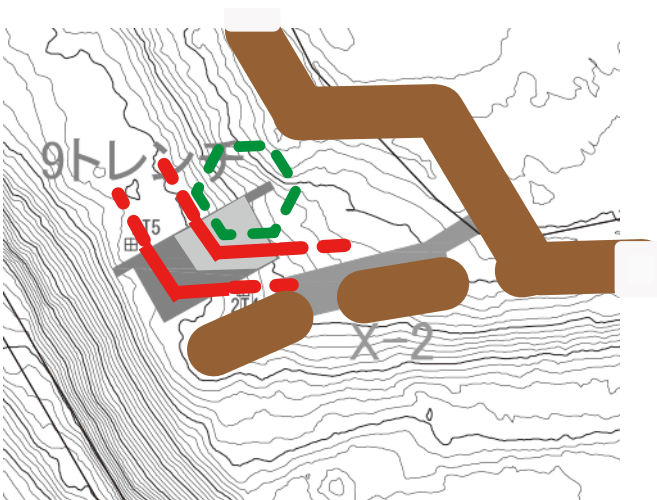
2) 10 トレンチ

天満山北麓、梨の木川の北岸には、そこから北北西へと延びる土塁の痕跡が 200m 以上にわたって確認できる。この土塁の築造方法および年代を特定するため、長さ 14m の断割トレンチを設定した。その結果、この土塁はこれまで検出された土塁とは異なり、地山を削り出す形で基底部を造成し、そのうえに土や礫を互層に積んでいることがわかった。無遺物でもあり、年代の特定には至らなかったが、丁寧かつ労力のかかる造作からは、たとえば関ヶ原合戦時のような臨時的な建造物ではなかったと思われ、本調査の見解としては、やはりこれも不破関に関連する土塁であるとしておく。東山道に続く近江から美濃へのメインルートである北国街道も、きちんと塞いでいたものと考えられる。

本調査にあたっては、地権者の方々のご厚情をいただき、また松尾自治区・小関自治区の皆様にはたいへんお世話になりました。心より御礼申し上げます。



9トレンチ遺構検出状況と北壁土層断面



9トレンチの溝状遺構と土塁の関係 (1:500)



他の場所で確認された六角形建物
(上：土塁北東隅
左：東山道沿い西端)



鞠智城（熊本県）の八角形鼓楼
（熊本県立装飾古墳館 HP より）



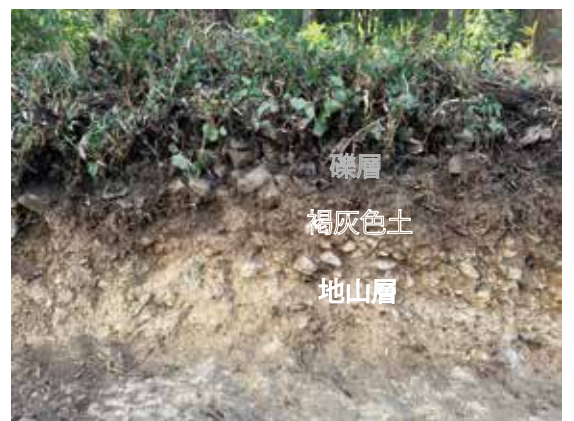
段丘崖に建つ六角形望楼と土塁
（生成 AI によるイメージ図。実際とは異なります）



2026 年度不破関跡発掘調査位置図（1:12,500）



10 トレンチ土塁断割状況



土塁土層写真